

花

土肥妙子

花の後ろには、何かがいる。

その花を通してメッセージを送っている誰かがいるような気がする。

春。関東平野の桜が一齐に、無視できないほどの存在感で街を席卷する。朝焼け空のピンクの雲を引っ張り降ろしたような姿が、あたりの空気を一変させる。突然の気配の変わりように、ハツとして花を見ない人は、多分、いない。

「美しいものを見るために、今、この時を使いなさい」

桜の花は、何者かのメッセージを携えてそこにいるような気がする。

25年前、結婚記念に背の高いパキラの鉢植えをもらった。太い幹は一番美しく見える高さにぷつりと切られ、断面には葉が塗られていて、いくら経っても不用に背が高くなることはなかった。美しい姿は長い間損なわれず、冬になると、用済みの葉は、土色に変わってカーペットの上にハラハラと落ち、春になると枝からは新しい葉が何枚も生まれた。

7年経ち、新しい家に住まいを変えた時も、その姿は変わらなかった。

更に18年が経った。美しかった枝ぶりは不恰好にくねり、新しく生まれる葉の数も、めっきり少なくなった。

日当たりの良い2階の踊り場に据えられたパキラを毎日見ながら、私は思う。

「こんなに長い間一緒にいたのだもの、今更見捨てられないんだけど」

枝ぶりは勢いを失い、乾いた幹が白い鉢の真ん中に立っていた。かつて、見惚れるほど美しかった時、見るたびに吹いた気持ちの良い風は、ずっと前に吹き止んでしまっていた。

ある晩、大きな月が出た。踊り場の窓から、遮るものもなく月の光がまっすぐに差し込んでいた。この木を見るために、夜空に登ったような月だった。月に惹かれて見上げると、パキラの枝が目に入った。

「何だろう、枝の先にあるバトミントンのシャトルのような。。。」
今まで見たこともない、何か、だった。

薄紫色の細く長い羽の束が一つだけ、月に照らされて、細った枝に静かに止まっていた。

「花だーパキラの花だ」

私は、興奮して写真を何枚も撮った。

次の朝一番に見に行くと、パキラの枝に、花はなかった。

まだ生きて呼吸しているようなパキラの花がフローリングの床に転がっていた。

「パキラは私の心を読んだのだろうか」

25年間にひと晩だけ咲いたパキラの花だった。

その後、新しい葉は枝の途中の小さい膨らみから生まれて来ることはなかった。

思うのである、「さようなら」を言うために、パキラは羽のような花を咲かせたのではないかと。

高校の剣道部で一緒だった田村君のお葬式に出たのは、10年ほど前だった。

さらにその2年前、首に白いコルセットをつけて彼は同窓会にやって来た。

「首の骨にガンが見つかってね。兄を事故で亡くした時、お袋が一年も塞ぎ込んだんだよ。また、お袋をそんな目に合わせるのが辛い。」

その後、年賀状も変わりなく受け取り、彼の口から特に病気のことを聞くこともなく2年が過ぎた。私は、「田村君は病気に打ち勝ったんだ」と、根拠なく思うようになった。私以外の仲間達も同じように感じていたのだと後から知った。

訃報を受け取ったのは、1月末だった。遠方から、万障繰り合わせ、皆が駆けつけた。

薄れる意識の中で田村君が妻と一ヶ月半かけて準備した別れの会は、凄かった。

元気とも思える声で録音された最期のメッセージが、家族に向けて、友人に向けて、職場の同僚に向けて語りかけた。心のこもった田村君らしいメッセージだった。祭壇に隙間なく植え込むようにして飾られた一面の百合の花は、田村君のメッセージを結晶させたように濁りがなかった。

真白い百合を一抱えも手渡され、持ち帰った花を大きめの花瓶に生けて玄関に置いた。寒い2月の玄関とはいえ、百合の花達は萎れもせず、黄ばみもせず、2週間、3週間と咲き続け、1ヶ月以上も元の姿のまま咲き続けたのである。

49日間、死者はこの世界にとどまるというのを聞いたことがある。

不思議な百合の花束だった。

花の後ろにメッセージを送る誰かが、やっぱりいる、と思うのである。